

# 東京一の 碁盤屋で 修業



## 大竹さんが作る駒の種類



大竹さんが手掛ける駒には、彫刻刀で文字の形を彫り、漆を入れる簡素な「彫駒」、彫った文字の部分が平らになるように漆を埋める「彫埋駒」、そして、彫り埋めの文字を漆でなぞって立体的な膨らみを出す、駒として最高峰となる「盛上駒」の3種類がある。

## 日夜、鍛錬に励む

高校を卒業すると他人の飯を食ってこいと、碁盤屋に奉公に出され、住み込みで修行に明け暮れた18歳の太田さん。「碁盤も鉋かんや鑿のみを使うので駒作りと同じなんです。修業初日、開口一番に『お前は今日からプロだ。職人の技を見て覚えろ』と旦那さんに言われました。誰も教えてくれない。見て覚えなきゃ駄目なんです。おやじと旦那さんが二人前にならないければ帰らせない』と約束してしましたから、早く三条に帰りたい一心から無我夢中で修行に励みました。当時のことを鮮明に覚えていると話す太田さん。

前沢碁盤店は、一切機械を使用せず、全て手作りで碁盤を製作していた。まさに職人の技術が結晶した場所だった。

太田さんの一日は、掃除と作業場の準備から始まる。日中はもっぱらサンドペーパーで碁盤の足を磨くため、指の指紋が無くなって血が出るので、布を巻きながら作業を続ける。夕方には作業場の後片付け、店番。夕食後は、へらに漆

を付けて盤に線を等間隔に引いていく「目盛り」をする。根気と集中力を必要とする仕事である。それが終わって夜の9時半頃によく銭湯に行き、あとは寝るだけ。休みは月に2日、修業一辺倒の毎日だった。

3、4カ月が過ぎたころ、ようやく鉋を預けてもらった。削りの名人といわれた師匠の加藤さんに、「見て覚えろ」と言われ、その技を盗もうと盤を引いたり刃の合わせ方や研ぎを見たりして腕を磨いた。「本来、職人は技を教えてくれません。それでも師匠に『お前の鉋の研ぎ方は抜群にうまいが、最後に鉋の刃を丸めてみる』と仕上げの微妙な秘訣を教えてもらいました。ですから、今でも最後に鉋の刃を丸めるんです」と当時の懐かしむ太田さん。前沢碁盤店に来てから3年が経過する頃、旦那さんが亡くなったことを契機に三条に戻ることとなる。

ここでの修業が、今日に至る技の原点となっている。

## 二代目竹風として歩む

21歳で修業先から三条市に戻った太田さん。帰ってきた矢先、治五郎さんに「60歳になったら身を引く」と言われた。あと10年もない、そんな不安がよぎった。前沢での修業は碁盤製作しかやっていないし、治五郎さんは駒の作り方を教えてくれない。だから、毎日、治五郎さんの技を見て覚えた。30歳を過ぎた頃、治五郎さんから「お前に竹風を引き渡す」と言われた。その後、駒の値段について相談したところ「お前が好きな値を付ければいい」と言われた。その時、やっと一人前として認められたと思ったという。

現在、駒作りで生計を立てる職人「駒師」が存在するのは三条市の他に大阪市、駒の産地として有名な山形県天童市だけ。太田さんは東京の駒師の流れを汲んでいるが、今では盛上駒を作る駒師は全国でも5、6人しかいない。

これまで積み上げてきた駒師としての技術と駒の品質が評価され、太田さんの

工房には全国から駒を作ってほしいと直接依頼に来る人が後を絶たない。また、盛上駒は、その美しさもさることながら、製造の難しさと完成までに多くの時間を要することから、販売数の絶対量が少なく希少価値が高い。将棋のタイトル戦での使用やプロのトップ棋士に愛用されるほどの駒として、全国的にもトップの評価を得ており、最高峰の駒として認知されている。

それほど高い評価を受けているにも関わらず、飽く無き探究心が尽きることはない。「毎年、天童市の駒師と交流していますが、自分たちの強みを改めて見つめ直し、他の駒作りの姿勢や手法を学んでいます。固定観念に縛られず、より良い駒を作るために研究を続け、最高の駒作りを追求しています」。最高峰の頂に足を踏み入れた今でも、太田さんはさらなる技術の向上を目指し、切磋琢磨を続けている。